



C A S A 連続市民講座
第 16 期 地球環境大学
 課外講座

ブナ林見学

とき：2008年8月3日（日）9:00～16:00

場所：和泉葛城山

第16期地球環境大学「地球温暖化と農業・漁業・林業への影響」の課外講座（2008年8月3日）は、和泉葛城山のブナ林を教室にして行なわれました。

午前中は「和泉葛城山 ブナ愛樹クラブ」の弘田さん、黒坂さんから説明を受けながら、ブナ林を見学しました。“どんぐり”でなじみの深い“ブナ”は、冷温帯落葉樹林帯（ブナ帯）に生息する



写真2 ブナの葉

（ブナの葉面は波状になっており、その波の凹んだ部分に葉脈が通っているという特徴があります）



写真1 ブナの実がなっているところ

樹木で、日本では鹿児島から北海道まで広く全国に分布しています。垂直分布でみると、年平均気温3.5～12.0℃の範囲にあり、中部地方以南では標高800～1,800mの間に生息しているそうです。和泉葛城山のブナ林も、北側傾斜面（大阪側）の標高650～858mの間にあります。この和泉葛城山のブナ林は、1922年に国の天然記念物に指定されました（8haが5ヶ所）。当時は、指定地域内に直径30cm以上のブナが1,800本あったそうです。

ブナ林を歩き回って私たちが目にしたのは、立派なブナの大木でした。数は少ないもののほ

とんどのブナが巨木です。素人の私は、これだけ立派な樹が育っているのなら安泰！と思ってしまいましたが、むしろこれは新しい若木が育っていない状況であると理解しなければならないそうです。ブナの数が減ることで、風媒による受粉が困難となり、果実（種子）が結実せず、若木が育たないという悪循環となっているのです。ブナは7年に一度豊作があると言われており、「和泉葛城山 ブナ愛樹クラブ」のみなさんは、こういった年に種を採取し、畑で一定の大きさになるまで育て、その苗を葛城山に移植するという根気強い活動をされています。それだけ愛情をかけて植栽した若木も、すべてが育つわけではありません。（心ない人が若木を盗むということさえもあるそうです！）ブナ林が減少するのも何らかの要因があつてのことであり、そうした要因を探りながら、人間が管理していくには、急ぎながらも息の長い活動が必要なのだと思います。

昼食休憩のあと、ヒノキ林で間伐体験をしました。木を倒すには、切り倒したい方向の反対側の幹に切り込みを入れ、そのあと切り込みを目がけてうしろからノコギリを入れていきます。先ほどのブナに比べればヒノキは細い幹で



写真3 ヒノキの木の切り株
(とてもいい匂いがしています)

したが、傾斜がきつく柔らかい足場で、慣れないのこぎりを使う作業は思った以上に大変でした。倒れるスペースを確保しながら切り倒す木を選びますが、他の木にひっかかってうまく倒れない場合があります。そのときはロープを「もやい結び」にして、引き倒します。切り倒したヒノキは、枝きりを行ない、適当な長さに切っておきます。これで一連の作業が終了です。かつては間伐材にも買い手があつたそうですが、ここ10年位は、もったいないことになるのでしょうか？そのまま放置して山の肥料になっています。この時期はヒノ

キがたくさん水分を吸収するため、外側の皮を簡単に剥ぐことができます。作業が終わってへとへとだった参加者も、この皮剥ぎには大興奮でした。そして、木こりを体験した記念に、ヒノキの輪切りをいただきました。

自然環境の保全にも地球温暖化対策にも有効である森林の管理について、造詣を深められた1日でした。

(報告：入江智恵子
CASAボランティア)



写真4 参加の皆さん